

第 630 回

日本小児科学会東京都地方会講話会

プロ グ ラ ム

日 時 平成28年9月10日(土) 午後2時00分

場 所 飯田橋レインボービル7F大会議室



次回以降開催予定日

- 平成28年10月22日(土) 東京女子医科大学弥生記念講堂
平成28年12月17日(土) 東京女子医科大学弥生記念講堂
平成29年1月21日(土) 東京女子医科大学弥生記念講堂
平成29年2月18日(土) 東京女子医科大学弥生記念講堂
平成29年3月18日(土) 東京女子医科大学弥生記念講堂

世話人

- プログラム係 満生 紀子
東京医科歯科大学小児科 03(3813)6111
(FAX) 03(5803)5246
- 会場係 伊藤 康
東京女子医科大学小児科 03(3353)8111
(FAX) 03(5269)7338
- 事務局 03(5388)7007
e-mail: jpstokyo-office@umin.ac.jp

第 630 回 日本小児科学会東京都地方会講話会演題

(1題 6分、指定発言 5分、追加討論 3分以内、厳守のこと。○印演者)

第1グループ 14:00—14:35

座長 森山 剣光（東京医科歯科大学小児科）

1) 右半身麻痺にて発症した特発性脳梗塞の1例

○渡邊 由祐、小穴 信吾、浦辺 智美、竹下 美佳、森下那月美、森地振一郎、石田 悠、
中山 岳、河島 尚志
(東京医科大学小児科)

症例は1歳女児。右半身麻痺、右半身性けいれんを認め、頭部MRIで左尾状核頭、内包前脚後脚、左被殻腹側に拡散強調像で高信号、T2WIで高信号を認めた。基礎疾患は同定できず特発性脳梗塞と診断。アスピリンなどの保存的加療で麻痺は改善し、3歳の時点で運動機能も含め発達は順調である。小児の脳梗塞は稀であり文献考察を加え報告する。

2) けいれん発作の精査のため来院したビタミンD欠乏性低カルシウム血症の1例

○中澤 美賀¹⁾、田中 沙季¹⁾、坂口 陽平¹⁾、入鹿山佳代¹⁾、高 京愛¹⁾、醍醐 政樹¹⁾、
小松 充孝¹⁾、春名 英典²⁾、田久保憲行²⁾、清水 俊明²⁾

(賛育会病院小児科)¹⁾、(順天堂大学小児科)²⁾

周産期歴に異常なく、生来健康な7か月女児。無熱性けいれんを主訴に受診された。著明な低Ca血症に加え、高ALP血症・血中副甲状腺ホルモン高値・25OHD3低値・単純X線写真でくる病性変化を認めたことよりビタミンD欠乏症の診断に至った。完全母乳栄養、離乳開始の遅れに加え極端に日光浴を避ける様な生活習慣があり、本症を発症したと考えられた。

3) バナナにより食物依存性運動誘発アナフィラキシーをおこした1例

○栗原 健、高橋 由希、渡部 浩平、湯田 貴江、宮原麻衣子、白川 清吾、増田 敬
(同愛記念病院小児科)

症例は13歳女子。給食後運動中のアナフィラキシーを主訴に受診した。経過より食物依存性運動誘発アナフィラキシーが疑われた。問診より可能性のあったバナナ摂取後に運動負荷試験を実施したところ誘発症状を認めた。バナナが抗原となる本疾患の報告はなかった。また、特異的IgEコンポーネント測定も実施した。

指定発言 北林 耐（国際医療福祉大学三田病院小児科）

第2グループ 14:35—15:10

座長 宮入 烈（国立成育医療研究センター感染症科）

4) *Ureaplasma*による呼吸障害が疑われた後期早産児の2症例

○國友 愛里、関 真澄、齋藤 遥子、鈴木 亮平、相良 長俊、本木 隆規、青田 明子、
田村英一郎、赤司 賢一、勝沼 俊雄
(東京慈恵会医科大学第三病院小児科)

*Ureaplasma*は女性生殖器常在菌であり在胎34週未満の早産児において慢性肺疾患との関連が示唆されている。しかし在胎34週以降の後期早産児における病的意義には不明な点が多い。人工呼吸管理を要する呼吸障害を呈した*Ureaplasma*陽性症例2例（症例1:34週6日、症例2:36週5日）を経験したので報告する。

5) 海外からの渡航者による輸入麻疹の1例

○土田 裕子、末永 祐太、西端みどり、吉本 優里、大熊 喜彰、山中 純子、瓜生 英子、
佐藤 典子、七野 浩之 (国立国際医療研究センター小児科)

ジャカルタからの旅行者でインドネシア人の8か月男児。来日翌日から発熱し、発熱5日目で顔と体幹に融合傾向のある暗赤色紅斑で受診した。保健所に届け出を行い、咽頭ぬぐい液からPCR検査で麻疹ウイルス陽性(遺伝子型D8)が検出された。輸入麻疹が近年問題となっており、特に旅行者の発熱患者では熱型や病歴に注意することが重要である。

指定発言 山元 佳(国立国際医療研究センター国際感染症センター)

6) 多呼吸で受診し帰宅4時間後に、糖尿病性ケトアシドーシスを発症した1歳女児例

○藤澤 悠平、瀬戸比呂木、田邊 聰美、峯 佑介、青木 政子、奥野美佐子、鈴木 潤一、
石毛 美夏、浦上 達彦、渕上 達夫 (日本大学小児科)

1歳女児。多呼吸を主訴に前医へ救急搬送され、胸部X線写真に異常なく、自宅で経過観察を指示された。4時間後に意識障害が出現し前医を再診、糖尿病性ケトアシドーシス(DKA)と診断され、当院へ紹介入院した。乳幼児期発症のDKAの初発症状は非特異的で診断に苦慮することが多く、その診断と治療について文献的考察を含め報告する。

休憩 15:10—15:20

感染症だより 15:20—15:40 (講演:15分+質疑応答:5分)

座長 岩田 敏(慶應義塾大学感染症学教室)

砂川 富正(国立感染症研究所感染症疫学センター)

教育講演 15:40—16:40 (講演:50分+質疑応答:10分)

座長 門脇 弘子(山王病院小児科)

子どもの1型糖尿病について

浦上 達彦(日本大学医学部小児科学系小児科学教室)

本邦の子どもの1型糖尿病は、欧米と比べると発症率が極めて低いが、白人とは異なり臨床像・経過ともに多様性があることが特徴である。一方1型糖尿病の治療の中心は、年齢にかかわらず基礎-追加インスリン療法であるが、近年ではカーボカウントを用いた頻回注射法とポンプ治療(CSII)あるいはCGMと一体化したポンプ治療(SAP)が増加している。小児1型糖尿病の治療のゴールは、慢性血管合併症の発生・進展を防止し、糖尿病を持たない子どもと同等の生活を送ることにある。本講演では、この様な子どもの1型糖尿病の病態と治療について解説する。

第3グループ 16:40—17:20

座長 村瀬 正彦(昭和大学小児科)

7) ラスピリカーゼが一過性骨髄異常増殖症の高尿酸血症に著効したダウン症候群の早産児例

○末永 英世、大野 秀子、今井 憲、増本 健一、戸津 五月、中西 秀彦、内山 温、
楠田 聰 (東京女子医科大学母子総合医療センター新生児医学科)

在胎期間29週4日、出生体重2106gのダウン症候群男児。胎内発症した一過性骨髄異常増殖症による出生後の腫瘍崩壊症候群に伴う高尿酸血症に対して、ラスピリカーゼを使用することで高尿酸血症は速やかに改善した。短期的には明らかな副作用は認められていない。ラスピリカーゼは高尿酸血症に対する支持療法の選択肢の一つとなりうる。

8) 極低出生体重児における消化管穿孔のまとめ

○栗田健太郎¹⁾、池田 奈帆¹⁾、磯 武史¹⁾、仲川 真由¹⁾、池野 充¹⁾、北村 知宏¹⁾、吉川 尚美¹⁾、東海林宏道¹⁾、久田 研¹⁾、山高 篤行²⁾、清水 俊明¹⁾
(順天堂大学小児科)¹⁾、(同 小児外科・小児泌尿生殖器外科)²⁾

当院 NICU における過去 10 年間の消化管穿孔を合併した極低出生体重児について、新生児壞死性腸炎 (NEC)、胎便関連性腸閉塞、特発性腸穿孔の 3 つの原因疾患別に分類し、患者背景、臨床像、予後因子について検討した。臨床経過や X 線所見より三疾患の鑑別を行い、疾患別に対策を取ることが必要である。また、NEC の予後改善には早期診断が重要と思われた。

指定発言 土井 崇 (順天堂大学小児外科・小児泌尿生殖器外科)

9) 胆石性脾炎を契機に診断に至った脾胆管合流異常症の 1 例

○鈴木 詩央、飯島 正紀、森 琢磨、伊藤 怜司、井田 博幸 (東京慈恵会医科大学小児科)

ダウン症候群、房室中隔欠損症術後、高度房室弁逆流で治療中の 4 歳女児。入院数日前より腹痛を認め、急性脾炎の外科的治療目的で当院へ転院となった。精査で胆石・脾石、胆道拡張、脾胆管合流異常を認めた。基礎疾患のため、追加検査や術式の選択に難渋した。急性脾炎に対する検査法と治療方針の問題点に関して文献的考察を交えて報告する。

指定発言 芦塚 修一 (東京慈恵会医科大学小児外科)

第 4 グループ 17:20—17:50

座長 石塚 喜世伸 (東京女子医科大学腎臓小児科)

10) 当初尿路感染症が疑われた小児化膿性脊椎炎の 1 例

○篠原 慧、大森 多恵、與田 緑、奥津 美夏、吉橋 知邦、江口 紗子、平井 聖子、西口 康介、玉木 久光、伊藤 昌弘、三澤 正弘 (東京都立墨東病院小児科)

14 歳男子。主訴は発熱、腰痛。近医で尿中白血球を指摘され当院紹介となった。炎症反応上昇、造影 CT で L5/S1 椎間板周囲の脂肪織濃度上昇を認めた。MRI では T2FS で L5 椎体、L5/S1 椎間板に高信号域を認め化膿性脊椎炎と診断した。本症は当初尿路感染症と診断されることがあり、発熱を伴う腰痛では考慮する必要がある。

11) 脘炎が診断の契機になった尿膜管遺残症の 1 例

○小谷 昌史、山本明日香、吉野 浩、楊 國昌 (杏林大学小児科)

尿膜管遺残症は、臍からの尿排出や臍炎などを主訴に様々な年齢で診断される。今回、我々は臍炎を契機に診断に至った尿膜管遺残症の年長児を経験した。症例は 9 歳男児。発熱、腹痛、臍周囲の紅斑で受診した。画像検査により、臍部から膀胱上部にかけて広範囲な膿瘍が同定された。抗菌薬投与後、外科的に摘除した。文献的考察を含め報告する。

12) 急性巣状細菌性腎炎の治療中に川崎病を呈し血球貪食症候群を発症した 1 例

○西村 直人、中川 紀子、藤田 基資、野村 智章、釜江智佳子、金井 貴志、滝沢 真理 黒木 康富 (自衛隊中央病院小児科)

7 歳男児。急性巣状細菌性腎炎に対して CTX/ABPC の併用治療中に川崎病を発症。川崎病第 6 病日に血球貪食症候群 (HLH) を発症した。後日 DLST で ABPC 陽性の結果が判明。HLH の原因として ABPC による薬剤性が考えられた。過剰な炎症性サイトカインを機序とする川崎病と HLH がほぼ同時期に発症した症例を経験し、臨床的に示唆に富むと考え報告する。

【運営委員会だより】

1. 第 630 回講話会（平成 28 年 9 月）のプログラム編成について報告がありました。
2. 第 630 回講話会の教育講演および感染症だよりについて、講師と座長が確認されました。
3. 東京都地方会で作成する「緊急時を念頭にしたメーリングリスト」について、これまでに 494 名（全会員の 21%）の登録があったことが報告されました。
4. 第 629 回講話会（7 月）の出席者は 406 名、ベビーシッタールーム利用者は 6 名、前回講話会以降の新入会者 11 名、退会者は 3 名でした。

【演題の申し込みについてのお願い】

- ・ 動画が含まれる場合には、その旨を明示して下さい。
- ・ 原則として指定発言をつけて下さい。（共同演者から指定発言は頂けません）
- ・ 演題の締切は次のようになります。
- ・ 運営委員会にて抄録の修正をさせて頂く事もございますので、原則としてご了承下さい。

講話会開催月	演題締切	講話会開催月	演題締切	講話会開催月	演題締切
平成29年 1月	前年 11 月 30 日	2 月	前年 12 月 25 日	3 月	1 月 31 日
5 月	2 月 28 日	6 月	3 月 31 日	7 月	5 月 31 日
9 月	6 月 30 日	10 月	8 月 31 日	12 月	9 月 30 日

申込演題が規定数を上回った場合、さらに 1 回先になることがありますのでご了承下さい。

その場合、事務局よりご連絡します。

【演者の先生方へのお願い】

- ・ 一次抄録は 160 字以内に。また、二次抄録は日本小児科学会雑誌に掲載されますので規定の 200 字以内を厳守くださるようお願いいたします。（原稿はワード入力で e-mail にて事務局へお送り下さい。）
- ・ 出席した会員に発表の意味をより強く、明確に伝えるために、最後（または適切な時期）に Take Home Message（この発表から学ぶこと）を手短な一文で記したスライドを付け加えていただくようお願いいたします。

【会員登録事項の変更届についてのお願い】

- ・ 自宅、勤務先の住所（プログラム送付先）等の変更または、改姓があった場合は、速やかに東京都地方会事務局までご連絡下さい。
- ・ 退会される場合も必ずご連絡下さい。そのお届けがない場合は次年度も継続として年会費の請求を致します。

東京都地方会事務局 e-mail : jpstokyo-office@umin.ac.jp / FAX : 03 (5388) 5193

Presentationについて

発表は Computer Presentation (Windows) のみで受け付けます。Powerpoint 2000 以上で作成、Font 文字は Powerpoint 備え付けのみ。CD-R もしくは USB メモリーにて、第1、2 グループ発表者は午後1時30分までに、第3 グループ以降の発表者は午後3時までにスライド受付まで持参して下さい。機器操作は、当方で行います。あらかじめウイルス check をお願ひいたします。

動画について

動画の発表にはトラブルが多いため、下記の方針をご理解いただきますようお願い致します。

- ① 一般演題での動画の使用はできる限りお控えいただくようお願い致します。
- ② 動画の使用が不可避と考えられる場合、ファイルのセーブ法などの注意事項がありますので、学会事務局に必ず事前にご連絡ください。
- ③ ②の場合にも、動画の映写にトラブルがあったときに備え、静止画像のみで構成された代替パワーポイントファイルをご用意下さい。当日、動画の映写が不可能と判断された場合には、代替パワーポイントファイルを用いて、時間通りに学会を進行させていただきますことをご了承下さい。

〈ベビーシッタールーム開設のお知らせ〉

乳幼児を同伴される方のために、ベビーシッタールームを開設します。利用ご希望の方は、利用日の1週間前までに問診票をダウンロードし、必要事項を記載の上、事務局へe-mailまたはFAXでお申し込み下さい。問診票は東京都地方会ホームページにございます。利用当日、お子様が好きな食べもの・飲料・おもちゃ・着替え・おむつなどに名前を付けてご持参下さい。キャンセルされる場合は、3日前までにご連絡をお願いします。なお費用は学会が負担いたします。

日本小児科学会東京都地方会事務局 TEL 03-5388-7007/FAX 03-5388-5193
e-mail : jpstokyo-office@umin.ac.jp

月刊誌 「小児科臨床」 のご案内

月刊誌「小児科臨床」は、1948年創刊以来一貫して小児科学の投稿誌としてのスタンスを守り、若い小児科医の研究発表の場として活用されています。

弊誌は増刊号を含めて年間13号を発刊し、小児医療・小児保健に関わる多くの先生方から、日常の臨床に役立つ雑誌としてご好評頂いております。

編集顧問

加藤精彦・早川浩

(第68巻2015年)

4号 特集

私の処方2015

編集委員

別所文雄・水口雅・岩田敏・松山健

増刊

これから的小児医療

—小児科医はどこに向かうのか—

発 行

月刊(毎月20日発行・土日祝は繰り下げ)

12号 特集

小児感染症2015

—小児感染症のマネージメント—

定 價

普通号(年10回) 本体 2,600円+税

(第69巻2016年)

4号 特集

特集号(年2回) 本体 4,700円+税

小児慢性疾患の成人期移行の

増刊号(年1回) 本体 6,200円+税

現状と問題点

年間購読料(前納) 本体 41,600円+税

